



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	犀を想う : 『西遊記』挿絵・連環画の犀牛怪図像
Author(s)	武田, 雅哉
Citation	連環画研究, 8, 107-127
Issue Date	2019-03-10
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.98472
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98472
Type	departmental bulletin paper
File Information	renkanga_8_107-127.pdf



犀を想う——『西遊記』挿絵・連環画の犀牛怪図像

武田 雅哉

拡散する『西遊記』

『西遊記』のなかの、あるエピソードを、大きくふくらませて創作された「三たび白骨精を打つ」（三打白骨精）を、さらに新たな解釈によって改編し、コン・リーが白骨精を演じた2016年公開の中国・香港合作映画『西遊記 孫悟空 vs 白骨精』（原題『西遊記之孫悟空三打白骨精』）のエンディングでは、1982年製作のテレビシリーズ『西遊記』のテーマソング「敢問路在何方」（閻肅作詞、許鏡清作曲）が流れた。さらには、テレビのバラエティ番組などで、京劇のような伝統劇の『西遊記』ものが演じられるときにも、このテーマがアレンジされて聞こえてくることがよくある。これは、このテレビシリーズの中国における影響力の大きさを物語っているが、何度も再放送されたことにより、『西遊記』の原著を読んだことのない多くの中国人にとっては、これが『西遊記』物語の標準として認識されているようだ。

メディアの多様化によって、これからさき、テレビや映画やマンガで『西遊記』を享受することはあっても、文字を追いつつこの物語を楽しむ機会が、いよいよ激減していくのかもしれないのは、日本も中国も似たような状況にあるのだろう。大学の授業で、大量の文字資料も配付しつつ『西遊記』を講じたあと、学生たちから感想のレポートが送られてきた。そのひとつには、こうあった。——「講義を聴いて関心を持ちました。本屋でマンガ版の『最遊記』を見つけたので、まずはこれを読んでみようと思います」。その向学心あふれる学生には、あわてて嚴重注意をした。どこから話を始めたらいいのか迷ったが、とりあえず「まあ、落ち着きなさい」と伝えた。

『西遊記』物語のひとつの完成が、明代の中後期であるとして、書き手と読み手を包含する当時の中国人の脳裏に描かれた『西遊記』の「世界」の風景を、現代のわれわれが同じように体験することは、はたして可能なのか？ あるいはそんなことは、もはや必要ないのか？

明代中国人の脳内に映し出されていたであろう『西遊記』物語のヴィジュアル・イメージを、なるべく近くで見たいと、筆者は思っている。研究者たちが、多くの版本の差違を、一字一句、果ては刷りの状態や墨の汚れにいたるまで仔細に調査するといった、はたから見ればなんとも辛気臭い作業に熱を上げているのも、おそらくそのような願望をいだいているからにちがいない。ここでは、ひとつのケースをとりあ

げて、明代人と現代人が見た「世界のかげら」の差違について考えてみよう。おもな材料は、もちろん連環画だが、問題は連環画にとどまらない。

〈犀牛怪〉のエピソード

いま俎上にあげたいのは、『西遊記』の第91回から92回にかけて登場する三人の「犀牛怪」——^{さい}犀の妖怪である。

天竺国の手前に位置する金平府に到った三蔵法師一行は、土地の僧たちにもてなされる。ちょうど元宵節だということで、しばしこの地に逗留することとし、灯籠見物としゃれこんだ。この灯籠に使われるのが蘇合香油という高級な油だったが、官民が用意した大量の香油は、なぜかすぐになくなるのだった。この現象を、土地の者は、仏さまが持っていくのだと信じ、香油はお供え物とみなされていた。

その日も狂風とともに「仏さま」が降臨し、香油を取りにきたが、あろうことか三蔵もさらわれてしまう。「仏さま」の正体が妖魔であると見抜いた悟空は、かれらが青龍山の玄英洞に棲む、辟寒大王、辟暑大王、そして辟塵大王と名の妖怪であることを知る。かれらは蘇合香油が好物なので、人びとを騙して香油をせしめていたのだが、今回は三蔵がいたのでこれを誘拐し、その肉を食べようという魂胆だったのである。悟空は三蔵を救うべく玄英洞に攻め入り、三大王と戦うが、敵もなかなか強く、悟空も歯が立たない。

ひとまず逃げ戻った悟空は、八戒、悟浄と作戦会議。悟空が「敵の正体は犀だろう」と言うと、八戒は「犀だとしたら、つかまえて、のこぎりで角を切りおとせば、なん両もの銀子になるぜ」と言う。三人は雲に乗って、敵陣へと飛ぶ（以上が第91回）。

三人と、牛類の妖怪で構成される三大王の軍団との戦いが始まる。多勢に無勢、三蔵を救うどころか、八戒と悟浄も捕まってしまった。ひとり悟空は天界に飛び、太白金星に相談すると「^{しもくきんせい}四木禽星に相談せよ」とアドバイスされる。四木禽星とは、二十八宿のうちの^{かくもくこう}角木蛟、^{ともくかい}斗木獬、^{けいもくろう}奎木狼、^{せいもくかん}井木犴の四人の星官のことだ。四星官と悟空は敵陣に攻め入って、三蔵、八戒、悟浄を救いだし、逃げた三大王を追う。三大王は海中に逃げるが、龍王とその太子^{まごう}摩昂も悟空たちに加勢する。犀の本性を現わした三大王は、いずれも捕獲されたあげく首を切られ、悟空と八戒は、一匹の頭から二本づつ、しめて六本の角を採取した。

犀の名前

『西遊記』における命名法には、^{みょうせんじしやう}名詮自性——その名がその正体や本質を暗示している——の原理がはたらいっているのだが、これら三大王の名前には、すでにその正体が見え隠れしている。「辟寒」「辟暑」「辟塵」は、それぞれ「避寒」「避暑」「避塵」、すなわち「寒さを避ける」「暑さを避ける」「塵埃を避ける」という意味を隠

している。テキストの上には、三大王がこれらを避けたという記述はないので、中国における犀の文化的背景に親しくない現代の読者がそのまま読むと、じつに奇妙な名前ということになる。まずは三大王の名前の背景を説明しておこう。

中国人は、いや人類は、この動物に想像力を刺激されてきた。「この動物」とは、とりあえず、古来中国人が「犀」や「犀牛」と呼んできたもののこととっておこう。だが、明代の中国人が「犀」と聞いて思いうかべたイメージと、現代の中国人のそれとのあいだには、大きな齟齬があったようだ。これは本稿のテーマでもある。

中国人は、犀の角^{つの}に、じつに多くの不思議な効能があるということを語ってきたものだ。たとえば以下に列挙するのは犀の角につけられたさまざまな名称であるが、それぞれが特殊な効能を持っているとされた。

「通天犀」——毒を中和する。

「駭^{がいけい}鶏犀」——鶏を驚かす。

「辟寒犀」——寒さを避ける。

「辟暑犀」——暑さを避ける。

「辟塵犀」——塵埃を避ける。

「辟水犀」——水を避ける。

「光明犀」——光り輝く。

「鑷^{けんぶん}忿犀」——怒りを取り除く。

共通するのは、なにものかを排除するという機能であろう。通天犀の角で作ったマドラーを用意しておけば、毒入りの飲み物も中和できる。取り入れの終わった穀物の山の上に駭鶏犀の角を置いておけば、鶏どもにつまみ食いされる心配はない。冬には辟寒犀の角を部屋に置いておけば、暖気を発して部屋はほっかほか。夏には辟暑犀の角がクーラーとなる。ご婦人が辟塵犀でこしらえた櫛を頭に挿していれば、髪にはほこりがつかないし、書斎に置いておけば、ほこりが積もらず便利である。光明犀の角は闇夜を照らし、鑷忿犀の角で作ったアクセサリーを携帯していれば、いらいらすることはない。辟水犀はもともと水に生息する犀で、海中を進むときには、海水が道をあけるといふ。そこで、その角を魚の形に彫刻したものを、人が口にくわえて水にもぐれば、さながら潜水帽をかぶっているかのように、その周囲三尺には水のない空間ができ、呼吸ができるというのである。

三大王は、それぞれが犀の角の効能を名前にしているのであった。犀牛怪が海中を進むときには、その角で水をかき分けることができるとの描写があるが、これも「辟水」という効能に由来している。太白金星は、悟空にアドバイスをする場面で、犀牛怪のことをこう説明している。

「やつらは三匹の犀牛の精じゃ。天文の図を持っていて、長年の修行を積み、雲や霧に乗って飛ぶこともできる。けっこうな清潔好きで、自分が汚れているのを嫌い、いつも水浴しがっている。仲間も多く、兕犀、雄犀、牯犀、斑犀というのがあるし、さらには胡冒犀、墮羅犀、通天花文犀などというのもある。みな、ひとつの毛穴から三本の毛が生えていて、角が二本生えている。川や海のなかを進むときには、水の道を開くこともできるのじゃ。その辟寒、辟暑、辟塵とかいうやつらは、どれも角が貴ばれるので、それを名とし、大王と称しているのであろう。やつらを捕まえたいのなら、四木禽星しかない。目にした途端、やつらはすぐに降伏じゃよ」^[1]

太白金星のこのセリフは、古来の犀にまつわる博物学の知識を祖述しているだけであり、唐代の『酉陽雜俎』巻十六、『嶺表録異』巻中、宋代の『埤雅』巻三、『証類本草』巻十七などに見えるものだ。詳しくは、ベルトルト・ラウファー『サイと一角獣』を参照されたい^[2]。

犀のヴィジュアル・イメージ

『西遊記』の挿絵では、犀牛怪はどう描かれているのだろうか。現存する最古の百回本『西遊記』の刊本である世徳堂本(1592)では、三大王が人型の時には、頭の左右に二本の角をはやした、地獄の「牛頭」のような姿で描かれている〔図1〕。文字テキストでも、牛の頭をした冥界の獄卒「牛頭」に似ている(都像牛頭鬼形)と描写される。それが本性を現わした姿は、現代の動物学で認識されている犀(*Rhinoceros*)ではなく、やはり牛のような動物として描かれている〔図2〕。じっさいの犀の姿を知っているわれわれ現



図1 犀牛怪(世徳堂本)

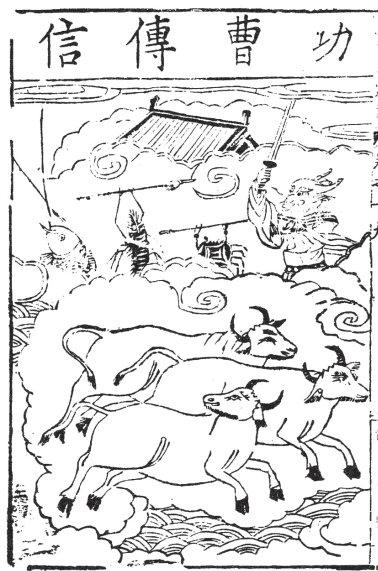


図2 犀牛怪(世徳堂本)

代人の目には、これは、犀の妖怪の絵としては、「まちがい」ということになるだろう。世徳堂本にやや遅れる明末の李卓吾本も、似たようなデザインだ〔図3〕〔図4〕。

だが、この絵を描いた明代の絵師、あるいはこの絵を鑑賞した明代の読者たちにとっては、どうだったのだろうか。当時の読者もまた、この絵を見て、その似て非なることを笑っていたのであろうか。

そもそも明代の中国人には、生きた犀や、動物学的に正確な犀の図像を目にする機会は、ほぼなかっただろう。戦国時代の中国で作られた青銅器には、東南アジアあたりからじっさいに運ばれてきた生きた犀を見て作ったのではないかと思われるような、じつにリアルな、二角のスマトラサイと思われる造形があり、今に伝わっている〔図5〕。地理的に、古代の中国人が観察しえたと考えられる一本角のインドサイ〔図6〕やジャワサイにせよ、二本角のスマトラサイにせよ、その角は鼻の先端にあり、二本の場合は直列に生えている。

だが、時代が下るにつれて、犀の図像は、だんだんあやしげになってくる。その理由は、実物を目にするチャンス、観察するチャンスの激減であろう。さまざまな絵画表現に見える犀は、牛もしくは鹿のようなからだに、一本ないし二本の角が生えてい



図3 犀牛怪（李卓吾本）



図4 犀牛怪（李卓吾本）



図5 犀牛の青銅器（戦国時代）



図6 インドサイ（*Rhinceros unicornis*）

るものだが、角が「どこに」「どのように」生えているのかという情報は、記憶のかなたにおいやられ、あいまいなものとなっていた。

明代の博物図譜である『三才図会』（1609）に描かれた、牛のような一角の犀の図像を見ると、西洋の一角獣^{ユニコーン}ながらに、ほぼ頭の頂点から生えている〔図7〕。本草学の書『証類本草』の明刊本（1523）にも、鹿のような奇妙な犀が描かれている〔図8〕。

現代中国語でも、犀のことは「犀牛^{シーニウ}」というが、辞書的な分類学の認識では、犀は牛の仲間だと考えられた。『西遊記』第91回では、妖怪のすがたは「二本の角が崢嶸^{そうこう}とそびえ」（二角崢嶸）と詩にうたわれている。すでに

触れたように、三匹から合計六本の角を切り取っているから、妖怪のモデルとなった犀は、二本角のスマトラサイあたりでなければならない。だがその二本の角は、明刊本の挿絵では、牛のように頭の左右に配置して描かれている。じつは直列に配置されているのが正しいということなど、思いもよらなかったのであろう。

『三才図会』や『証類本草』の犀の絵を見ると、あまり犀らしくはないものの、角だけはリアルに描かれている。じっさい中国では、犀角の工芸

がさかんに作られていたが、材料の角は、おもに異国からの輸入品であった。そのため、角だけは現物を観察して描くことができたのだろう。だが、それがどのような胴体を持った動物の頭の上に、どのように配置されているのかは、絵師たちの想像に任せるほかなかったのであった。そしてその絵師たちが想い描いた犀のイメージとは、多くの中国人が共有していた犀のイメージにほかならない。

悟空は太白金星から、犀の分類に関する蘊蓄を説かれ、退治できるのは四木禽星しかいないとのアドバイスを受けていたが、その四星官にたずねると、「相手が犀牛な



図7 『三才図会』（1609）「犀」



図8 『証類本草』（1523）「犀角」

らば、われわれみんなが行くにはおよばない。井宿（井木犴のこと）でじゅうぶんだ。かれは山に登っては虎を食い、海に入っては犀を擒^{とら}えるから」と告げた。

このあたりは「演禽術^{えんきんじゆつ}」の理論に拠っている。演禽術とは、天の二十八宿にそれぞれ配当させた動物を用いた占いの一種だが、明代の池本理^{ちほんり}が書いた『禽星易見』には、「〈井〉禽は天にあっては「天威星」と号す。その状は虎のごとし。二十八宿の主であり、禽星の王である。山に上っては虎豹を食い、水に下りては蛟龍を食う。その性質は猛烈で、動けば狂風が樹木をなぎたおし、石を走らせ砂を飛ばす。海に入っては波浪をおこし、龍は高く昇っていく」とあるのを、ほぼそのまま流用している^[3]。

ここで、三匹の犀牛怪が退治される経緯を少し詳しく見ておこう。

まずは辟塵大王が、龍王たちの軍団に捕えられ、縛り上げられる。もともと三匹とも生け捕りにするつもりであったものが、辟寒大王は、凶暴で性急な井木犴によって首を噛み切られ、あっけなくおだぶつ。辟暑大王も井木犴に耳を噛み切られ、捕獲される。

辟寒大王の死骸を見た悟空は、「のこぎりで二本の角を切り落とそう」（原文「鋸下他的這兩隻角」）と言い、二本を切り取ると、皮を剥ぎ、肉は龍王と摩昂太子に食べてもらうことにする。犀の皮は、のちほどなめして鎧の材料にするのだという。

こうして一件落着とはあいになったのだが、興奮した八戒が、いきなり戒刀を取り出して、生け捕りにしておいた辟塵と辟暑の頭をバツサリ切り落としてしまった。さらに、のこぎりでその角を切り、全部で「四本の角」が採取される（原文「隨即取鋸子鋸下四隻角來」）。

これを見ていた悟空は、八戒が切った四本の角を四星官に手渡し、「玉皇大帝に献上してくれ」と言う。また、自分で切った辟寒の角二本については、「仏さま」の正体が犀の妖怪であったことの証拠として、「一本は役所の金庫に収めておくがいい」と言い、「もう一本はおれが持っていて、靈山の仏祖に献上する」と言う。その最後の一本が、天竺で献上されたという記述は、『西遊記』のどこにも書かれていない。悟空がちょろまかしたのかもしれないし、『西遊記』の書き手が忘れてしまったのかもしれない。

ちなみに、実際の二角犀の角は、通常、前角が長くて後角が短く、両者は形状も性質も異なり、これを採取する人間にとっての用途も異なるようである。たとえば工芸品の材料にするのなら、前角か後角かによって、作られるものが制限されるだろう。ただいま引用した犀角をめぐる悟空のセリフからは、かれが前角と後角とを峻別して認識している様子はまったくうかがえない。あくまでも「六本の同様な角」を手に入れたということのようだ。やはり牛の角のように、左右シンメトリーで同形同質の二本の角を想定しているのであろう^[4]。

〈犀〉と〈鼻角獣〉

明末以降、宣教師が西洋から多くの書物を運んでくる。そのなかには動物図譜、博物図譜のたぐいもあっただろう。それが中国語に訳され、また図像も模写されて、中国で刊行されることもあった。清代初期のフィルディナンド・フェルビーストが制作した『^{こんよ}坤輿図説』（1683）などがそれで、これには「^{びかくじゅう}鼻角獣」なる動物の図像が掲載されている〔図9〕。これは西欧で犀をいう

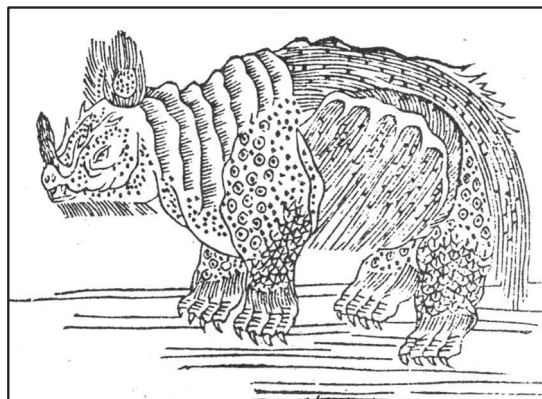


図9 『坤輿図説』（1683）「鼻角獣」

〈*Rhinoceros*〉（ラテン語）のたぐいの語彙を逐語的に中国語に訳したものだろう。〈*Rhinoceros*〉は「鼻に角があるもの」という意味であるが、英語では〈*Rhino*〉だけで犀のことをいう。

そういえば、古来、南太平洋のハイアイアイ群島に棲息し、1957年の核実験に起因した地殻変動による同群島の消滅とともに絶滅した「^{びこうるい}鼻行類（別号ハナアルキ）」の学名は〈*Rhinogradentia*〉すなわち「鼻で歩くもの」であった〔図10〕^{〔5〕}。

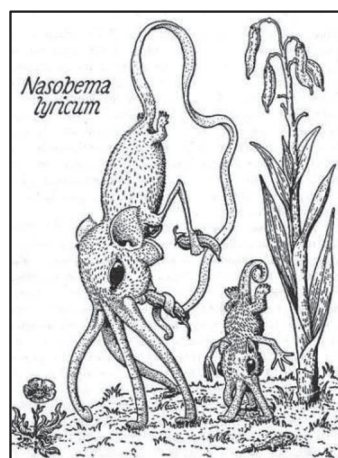


図10 ハナアルキ

『坤輿図説』の「鼻角獣」の図のほうは、その藍本となった図像は、どうやらアルブレヒト・デューラーが描いた、著名なインド犀の図（1515）〔図11〕に由来するものようだ。これを、西洋の画法に慣れていない中国人絵師が、見よう見まねで、かなり稚拙に模写したあげく、できあがったものなのだろう。デューラーの「犀」は、それはそれで、きわめて奇妙な想像力の産物なのであるが、デューラーという巨匠によって注入された迫力によ

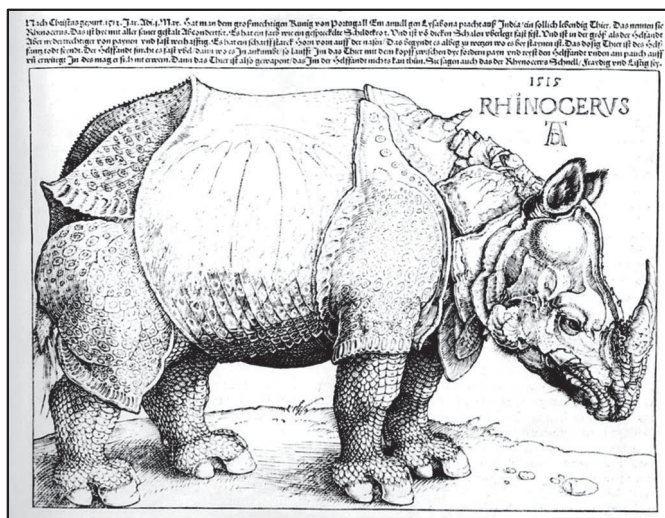


図11 アルブレヒト・デューラー「犀」（1515）

るものであろうか、そのアウラは特に西欧世界を魅了し、正統な犀のイメージとして、
 ながらく——おそらく現在でも？——君臨しつづけてきたものであった^{〔6〕}。

ここで重要なのは、当時の中国人にとって、『坤輿図説』の図像は、あくまでも異
 国に棲息すると伝えられる「鼻角獣^{リノケロス}」という動物なのであって、中国人が古代から伝
 承してきた「犀牛」ではなかったということである。「鼻角獣」と「犀牛」の、ふた
 つの語彙およびイメージは、しばらく並走をつづけていたが、西洋動物学の中国への
 流入に伴う中国博物学との整理統合の過程で、両者が合致するのは、清朝の末期にな
 ったからのことであった。

19世紀末の絵師呉友如が、西
 洋渡来の動物図譜を模したと思
 われる『中外百獣図』には、「独
 角犀牛」と「双角犀牛」の二点が
 収められていて、前者は名が
 「里諾西羅^{リノセロス}」であると明記され
 ている〔図12〕。書き添えられ
 た説明では、「独角」はアジアに
 棲息し、「双角」はアフリカに棲
 息するとしている^{〔7〕}。

20世紀になってから編まれた
 識字課本『澄衷蒙学堂字課図説』

(1904)は「犀」の項目を設け、
 図解を付し
 ているが
 〔図13〕、
 「アフリカ
 に産するも
 のは二角の
 犀で、その
 一角は鼻に
 あり、一角
 は頂にあ
 る。アジア



図12 『中外百獣図』(1891) 「独角犀牛」

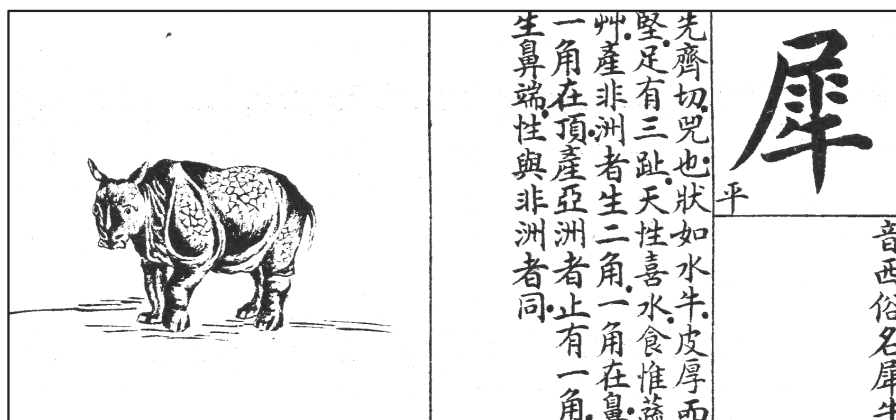


図13 『澄衷蒙学堂字課図説』(1904) 「犀」

に産するものは一角のみで、鼻の端に生える」と説明している^{〔8〕}。いずれにしても、
 こうして辞書の上に「Rhinoceros」＝「犀牛」と書き記されることで、とりあえず、
 一件落着とはあいなったのであった。

近代の光の影に

ところがここに、新たな問題が生じてはいないだろうか。現代中国において作られる『西遊記』の挿し絵や絵本において、この「犀牛の妖怪」をどう描くべきかという問題である。この種の問題は、ひとり『西遊記』の犀牛にとどまらない。古典を現代においてどのように表現するかという普遍的な問題である。

まず、近代のものとして、詳しい年代や作者は不明だが、おそらく清代末期くらいに描かれたとおぼしい、三百枚からなる『西遊記』の彩色絵——いま、『清彩絵全本西遊記』と題されて書籍化されているもの^[9]——の一枚を見てみよう〔図14〕。これは井木犴が犀の姿になった三人の大王を追い、辟寒大王の首に食らいついた場面である。井木犴はなかなか凶暴そうな二角の怪獣に描かれているが、それにく

らべて大王たちは、アンテロープ（^{れいよう}羚羊）やガゼルのような、かよわい小動物として描かれている。かれらの二本の角は、並列に配置されているのが確認できる。

19世紀末に刊行された石印本の『新説西遊記図像』の挿絵においても、正体を現わした犀牛怪は牛のような姿で描かれている^[10]。二本の角もまた、牛のように、頭の左右から生えている〔図15〕。これらは、明刊本の挿絵の「牛のような犀」を、ほぼそのまま踏襲したものであるといえるだろう。また、近代における犀に関する新たな科学的知見によって、これを描き変えたような形跡も見いだせない。



図14 『清彩絵全本西遊記』 井木犴と犀牛怪



図15 『新説西遊記図像』（清末） 犀牛怪

そして20世紀に入り、連環画が誕生すると、『西遊記』物語をヴィジュアルイズする作業も、急速、かつ大量に進められていく。

まずは、連環画『西遊記』の祖として知られる1920年代の『連環図画西遊記』（金少梅・章興瑞/絵画）を見てみよう。犀牛怪は、下集・第十冊に見えているが、その第六頁「四星捉怪」には、悟空と四木禽星に追われ、正体を現わして水中を敗走する犀牛怪を描くとともに、辟塵大王の顔面を、円形の枠の中に大きく描きこんでいる〔図16〕。人の姿をとっている時の大王の顔には、特に角のようなものは描かれていない。また、水中になかば身を隠した犀牛の角は、完全に牛そのもののものだ。

さらに第七頁「砍牛鋸角」では、画面の右に悟空、四木禽星、三蔵が描かれ、左には首を切られ、角を断たれた二匹の犀牛怪の死骸が転がり、中央には、もう一匹の妖怪の首を斬り、角を断とうとしている八戒が描かれている〔図17〕。これを仔細に見るならば、ほぼ牛そのままではあるが、鼻の先端に、なにやら突起物が描きこまれているのに気がつく。西洋動物学における犀の図像的情報が、すでに流入している時期である。絵師は、切られるべき角は頭部の左右から出ている二本の牛角としながらも、鼻の先端に突起のある犀の図像をどこかで目にし、その特徴



図16 『連環図画西遊記』（1920年代） 犀牛怪



図17 『連環図画西遊記』（1920年代） 犀牛怪

をも取り込んでみたのだろうか。ここには絵師の迷い、逡巡が見て取れるのかもしれない。

現代の連環画

20世紀の後半期、つまり中華人民共和国成立後に作られた現代の『西遊記』連環画においては、犀牛怪はどのようにデザインされているのであろうか。この時期に作られた『西遊記』ものの連環画は、おびただしい数にのぼると思われるが、手もとにあるもののみ、いくつか眺めてみよう。

★『活捉犀牛精』は、香港美麗美術社から1962年1月に初版が刊行されている。絵師は王祖元⁽¹¹⁾。

この連環画では、いささか狂ったデッサンながら、リアルな犀を目指してはいるが、古典的な犀のイメージも混在しているようだ〔図18〕。

鼻先の角は一本しか描かれていない。『西遊記』では妖怪一匹につき角を二本ずつ切ったことになっているのだから、妖怪の正体は二角犀でなければならない。

だが、よくよく見ると、鼻先の角のほかに、頭の上に曲がった角状のものを二本描きこんでいる。もしかしたら絵師は、こちらのほうを犀の角であると認識していたのかもしれない。だとすれば、この犀の図像は、中国古来の牛のような犀と近代のリアルな犀の図像情報とのあわいに生み出された過渡期のキメラであるということができよう。

★『挟捉犀牛怪』は、湖南美術出版社の『西遊記』連環画シリーズ全25冊のうちの第23冊であり、1981年3月第1版。「古月/改編、蔣太禄/絵画」とある。この連環画では、犀の本性を現わした妖怪の姿を描いたコマが数点確認できるのだが

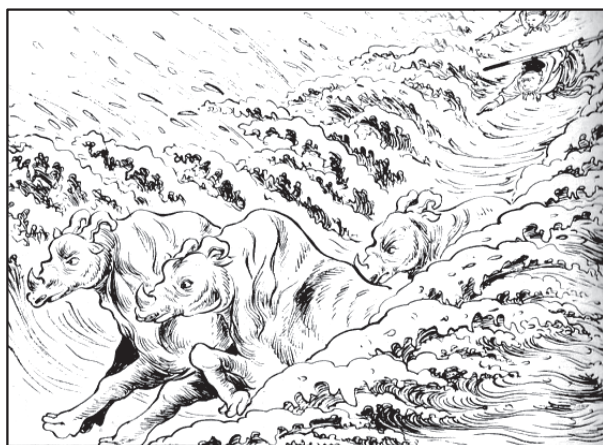


図18 『活捉犀牛精』（1962） 犀牛精



図19 『挟捉犀牛怪』（1981） 犀牛怪

〔図 19〕、いずれのコマにおいても、生物学的にはほぼ正確とってよい犀の図像として描かれていて、二本の角も、鼻先に直列に生えている。

★『玄英洞』は、河北美術出版社の『西遊記』連環画シリーズ全 34 冊の第 33 冊であり、手もとにあるのは、1983 年 3 月第 6 版。「徐英傑/改編、鍾志宏/絵画、潘真/封面絵」とある。

人型の妖怪の頭は、二角犀のかぶりものそのまま〔図 20〕、本性を現わした姿も、リアルな二角犀として描かれている〔図 21〕。

★『悟空降服犀牛怪』は、山東美術出版社の『西遊記故事選』シリーズ全 11 冊の第 10 冊であり、1984 年 1 月第 1 版。「郭子宣/改編、季鑫煥/絵画、孫愛華/封面」とある。

犀は、インドサイをモデルにしたのであろう、重層的な皮膚が強調されているとともに、インドサイの特徴である一本角になっている〔図 22〕。

だが、これでは六本の角を採取することができないのではないかと思いきや、よくよく見ると、いちばん奥の犀だけは二本角のようである。

★いわゆる狭義の連環画ではなく、むしろ絵本に分類されるものだが、1984 年に、外文出版社から英語版の『西遊記』の絵本シリーズが刊行されていた。

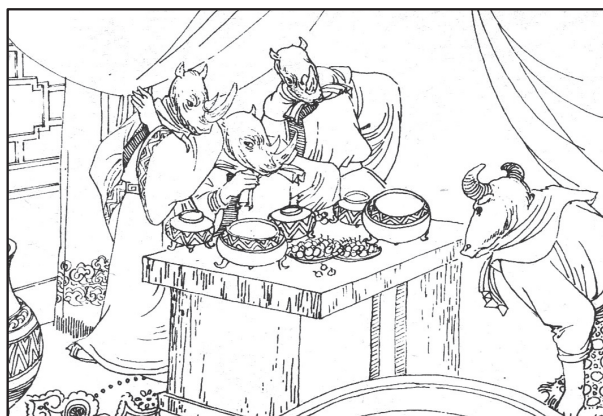


図 20 『玄英洞』（1983） 犀牛怪



図 21 『玄英洞』（1983） 犀牛怪



図 22 『悟空降服犀牛怪』（1984） 犀牛怪

『*Capturing the Three Rhinoceroses*』は、
「Liang Hongye [梁宏業] /改編、HongTao
[洪濤]、ShiWei [施蔚] /絵画」というク
レジットのある、オール・カラーのシリーズ
の一冊である^[12]。これもまた、動物学的に
正しい犀のイメージを参考にしながらも、子
供たちにも親しめる、コミカルなアニメ・タ
ッチでの表現をめざしたもののようだ〔図
23〕。犀の角の数に注目するならば、上下の
二匹は二角犀だが、真ん中の一匹は、どうい
うわけか一角犀になっている。

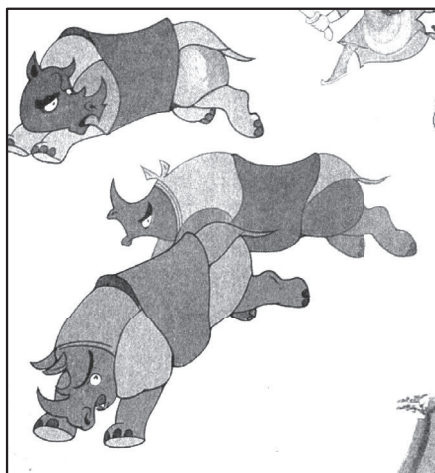


図 23 *Capturing the Three Rhinoceroses*

★『西遊記 連環画・下』の第 29 話「玄英洞」
は、少年児童出版社、1992 年 11 月第 1 版。

一頁に 2 コマを収めた 32 開本
のサイズの連環画であり、クレ
ジットには、「麗雍/編文、唐丁
華、丁寧/絵画」とある。正体を
現わした犀牛怪は、三匹すべて
が二角犀として描かれている
〔図 24〕。



図 24 『西遊記 連環画』「玄英洞」（1992） 犀牛怪

★『元宵擒犀牛』は、中国連環画
出版社の『西遊記』連環画シリ
ーズ全 60 冊の第 57 冊で、1997
年 11 月第 1 版。クレジットに
は「張玉枝/改編、王天恵/絵画」
とある。

犀牛怪は、人型の時には、鼻先
に角を頂いた、「犀のような顔」
で描かれているが〔図 25〕、正
体を現わした姿を見ると、動物
学的に正しい犀のイメージを参
照しながら描かれているようだ
〔図 26〕。



図 25 『元宵擒犀牛』（1997） 犀牛怪

ただし、この絵を見るかぎり、
先頭の一匹は隠れて見えないも

の、中央を走る一匹は一角犀として描かれていて、その奥の一匹は、二角犀として描かれている。一角と二角の混在現象が、ここにも見いだせる。

★著名な連環画家の陳惠冠が描いた、全 200 点からなるカラー版の大型イラスト『陳惠冠新絵全本西遊記』（上海古籍出版社、2001）にも、正体を現わした三大王が、動物学的正確さをめざして描かれている。そしてこれもまた、二角犀と一角犀とが混在しているように見える〔図 27〕。

現代の絵師たちは、犀の妖怪なのだから、生物学的に正しい「犀」を描かねばならないと考え、図鑑などを参照して正確を期したのだろう。とくに絵本を手にするよいこたちには、犀とはこういうものなのだという正しい知識が与えられねばならないのだから。

そのような、科学的に、また教育的に「正しい処理」を施された挿絵を与えられた読者

は、明代の人間が脳裏に思い描いた『西遊記』のヴィジュアル空間からは、どんどん乖離していかざるをえない。現代の読者には、正しい「犀」のイメージが与えられるかわりに、明代の作者なり読者なりが、ほぼ共有していた「犀牛」なるもののイメージは提供されず、忘れ去られてゆく。それぞれの時代の求めに添うように、読まれかたも変化していくのはやむをえない。だが、かつて物語を語り伝えた人びとの脳内に想像力をはばたかせることも、たまには必要なのではないだろうか。



図 26 『元宵擒犀牛』（1997） 犀牛怪



図 27 『陳惠冠新絵西遊記』（2001） 犀牛怪

潜水動物〈辟水金睛獸^{きんせい}〉

ところで『西遊記』には、三人の犀牛怪のほかに、犀に由来すると思われる怪獣が登場する。それは、牛魔王が龍王のところに遊びに行くときに乗っていた、辟水金睛獸^{きんせい}と呼ばれるやつであり、その名は、第 60 回から 63 回にかけて出現する。この怪獣の正体については、どこにもはっきりとは書かれていないのだが、その「辟水」という名前からして、犀のたぐいであることは明らかであろう。龍王のところに行くのだから海中を進まなければならない。まさに潜水艇として騎乗するには、ぴったりの怪獣なのである。牛魔王や悟空に乗りまわされ、用務が終わるまでは屋敷の外の柱につながれているというだけの地味な役まわりなのだが、寡黙で、ひたすら主人を乗せて走るだけのその姿は、社長に忠義を尽くしてご奉公する、お抱え運転手のようだ。そこはかとなく可愛らしく、『西遊記』に登場するサブ怪獣のなかでも、個人的にはたいへん気になる、愛いヤツなのである。

『清彩絵全本西遊記』では、頭頂に湾曲した犀の角状のものを生やした一角獣として描かれ、足は牛のように偶蹄になっている〔図 28〕。犀は奇蹄目である。麒麟^{かくたん}や角端のような中国の伝統的瑞獣のイメージも加味されているようだ。

任率英の連環画『三盗芭蕉扇』(1956)^[13]でも、やはり湾曲した角を生やした一角獣として描かれているが、足はライオンのような〔図 29〕。

『陳惠冠新絵全本西遊記』においても、偶蹄の一角獣として描かれているが、この屹立した角は、なかなかの逸品である〔図 30〕。それにしても、長すぎないか？



図 28 『清彩絵全本西遊記』 辟水金睛獸

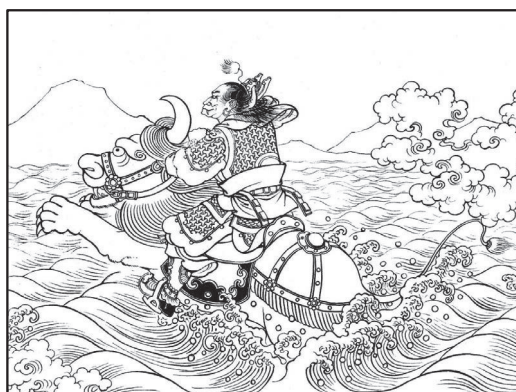


図 29 『三盗芭蕉扇』(1956) 辟水金睛獸



図 30 『陳惠冠新絵西遊記』
辟水金睛獸

ゾウを想え！

ウンベルト・エーコの小説には、しばしば^{ユニコーン}一角獣への言及が見られるが、その『薔薇の名前』（1980）には、バスカヴィルのウィリアム修道士が、若き見習い修道士アドソに、こう語る場面がある。

「ヴェネツィアのある旅行家で、非常に遠い土地にまで行った者がいる。地図に記されている〈^{フオンス・パラダイジ}楽園ノ泉〉の、ごく近くにまで行って、何頭もの一角獣に出会ったという。しかし彼が見かけたのは、いずれも粗暴で、下品で、ひどく醜くて、黒かった。わたしの考えでは、額に一本の角を生やした本物の獣を見たにちがいない。おそらくそれは、必ずしもすべてにおいて誤りを犯していたわけではない。古代の学問の大家たちが、神に許されて、わたしたちには見ることでできなかった事物をも目にする機会に恵まれ、わたしたちに事実を知らせようとしたときの最初の描写と、同じだったのではないか。ところが、〈^{アウクトリタース}権威〉から〈^{アウクトリタース}権威〉へと受け継がれていくうちに、事実はいよいよ空想のなかで変容し、一角獣は優美で、純白で、柔和な動物になってしまった」^{〔14〕}

ウィリアムのいう「ヴェネツィアのある旅行家」とは、マルコ・ポーロのことだろう。その『東方見聞録』第六章にはバスマン国（スマトラ島の北端、東海岸のパセイ地方）についての記述がある。マルコは、「この地方には野生の象や、象よりはやや小型の一角獣が多数に棲息している」として、それが「見るからに恐ろしげなる動物であって、ヨーロッパなどで空想されたり物語られたりしているような、あの乙女の膝に自ら身を投じて捕捉される一角獣などとは、およそ似ても似つかぬものである」と描写し、「繰り返し断言するが、それはヨーロッパ人が伝えているようなものとはまったく正反対の動物なのである」と念を押している。マルコが見た「一角獣」とは、一本の角をもつジャワサイだったのだろう^{〔15〕}。

『薔薇の名前』の舞台は、1327年の北イタリアである。マルコがヴェネツィアに帰ってきたのが1295年。ジェノヴァの牢獄で旅行記の口述筆記を完成させたのが1298年。その現存する最古の写本群は、いずれも14世紀のものであり、初の印刷本が刊行されたのは15世紀の後半のことである。エーコの遊戯につきあうならば、ウィリアムは、どこかの修道院の図書館に秘匿されていた、書き写されてまもない写本によって、『東方見聞録』の一角獣のくだりを読んだということになろうか。

^{ユニコーン}一角獣の角をめぐるのは、西欧世界においてもまた、中国と似たような幻獣生成のプロセスが認められる。あの優美な馬の姿をした一角獣を描いた図像のいずれを見ても、その角は、細長い、ねじれを持った形状を呈している。

14 世紀イタリアの動物寓意譚の挿絵を挙げておこう〔図 31〕。中国において、工芸の材料や薬物として現物がもたらされていた犀の角の形状のみが、観察が可能で、図像の描写も正確であったように、一角獣の角だけは現物を見ることができた。そしてその角の正体は、北極海に棲息する哺乳類イッカク（*Monodon monoceros*）の「角」であった〔図 32〕。



図 31 14 世紀イタリア動物寓意譚 一角獣

イッカクの雄は、その上顎左側の切歯^{せつし}が突出して伸長し、この「角」になる。通常、「角」は左巻きにねじれながら伸び、三メートルの長さにもなる。北極海で採取されたイッカクの切歯は、「一角獣の角」としてヨーロッパにもたらされ、解毒作用のある薬剤と

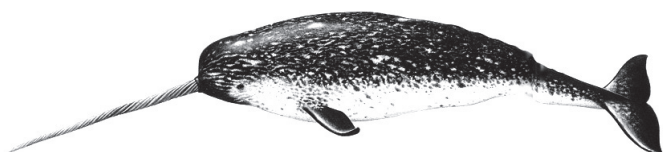


図 32 イッカク（*Monodon monoceros*）

して高値で売買されるとともに、人びとには、「この角が生えている動物は、どんな姿をしているのだろうか？」との想像を刺戟した^{〔16〕}。

現実の一角獣、つまり犀は、とても優美とは形容しがたい動物だったのだが、ウィリアム修道士のいう〈^{アウクトリタス}権威〉によって物語が作り出され、空想の世界で疾駆する一角獣のイメージは、実体そのものから乖離していき、「優美で、純白で、柔和な動物」に変貌していったのであった。『薔薇の名前』のこのくだりは、記号論学者のエーコならではの一角獣論といえようか。

紀元前 3 世紀、戦国時代の韓非が書いた哲学書『韓非子』の、「解老篇」と題する章には、次のような一節がある。

ひとは、生きた^{エレファント}象を目にする機会は、めったにない。

そこで、死んだ象の骨を手に入れ、その形を考えて、その生きているものを想うのだ。

だから、心で想いうかべたものを、象（=^{イメージ}像）というのである。

韓非の時代には、人類の繁栄とともに、すでにゾウは珍獣となっていた。しばしば南の国から貢ぎ物として運ばれてきたかもしれないが、容易に目にすることはかなわなかったであろう。そのような珍獣の、ひととき大きな骨が見られたりしたら、ひとは頭のなかで、その骨に肉付けをして、生きていたときの姿を想いうかべる。つまり、「想像」するわけである。恐竜の化石から、その生きている姿を復元する、あの作業と同じなのだ。

『韓非子』のこの一節は、「想像」とは「想象」つまり、「ゾウを想うこと」にほかならないのだということを伝えている。そのものが容易には見られない場合、われわれは、それに関する断片的な情報を集めようとする。そのうえで、全体の姿かたちを頭のなかに再構築してみる。ゾウという動物は「鼻が長い」らしい。「耳が大きい」らしい。そもそも「体が大きい」らしい。——そのような、ゾウに関する情報のパーツを寄せ集めて、ゾウとはこんな動物であろう、といったものを心に描くのである。

サイも考え！

ゾウでなくてもいい。サイでもブタでも、サルでもヒトでも同じことである。『西遊記』にたずさわった明代の中国人は、あるときは犀を想い、これにまつわる情報の断片を集めた。現代人から見ると、それは欠損だらけの情報であったかもしれないが、とりあえず、あのような犀牛の妖怪が完成したのであった。その、欠損だらけかもしれない古代人の想像力に、真摯につきあおうとしなければ、われわれはいずれ、「ゾウを想う」ことを怠った大罪により、とりかえしのつかない報復を受けることになるだろう。

——とかなんとか言いながら、それでも筆者をニンマリとさせてくれるのは、『西遊記』を描いた現代の挿絵、絵本、連環画において、一角犀と二角犀とが混在しているという、くだんの現象から顕在化した、絵師たちのおおらかな「錯視」である。これは、悪く言おうとすればいくらかでも^{けな}貶せるのだろうが、「上から目線」で批判したところで虚しいだけだ。そのような傲慢な態度には、いずれ報いがあるだろうし、似たようなことは、われわれも、年がら年じゅう、やらかしているのである。いまできるのは、なぜそうなったのか、絵師たちの立場になって、想像をたくましくすることだけだ。

先述のように、『西遊記』のテキストでは、「悟空や八戒が、三匹の犀から合計六本の同形の犀角を採取する」というストーリーを成立させるべく、「牛のように左右シンメトリーをなす二角を持った犀」のイメージが大前提にされていた。あるいはこう言ってもいいだろう。少なくとも『西遊記』のテキストを綴った明代中国人の脳裏には、そのようなストーリーを構築すべく、それはそれで理路整然とした「牛のような二角犀」の図像学が、しっかりと共有されていたに相違ないと。

現代の連環画絵師たちは、これに対して、五百年前の中国人の「誤った知識」を修正し、「科学的に正しい犀」の姿を提供するほうを重視した。そのような趨勢は、新中国における新しい連環画を模索するヴィジョンと軌を一にしていたのかもしれない。だが、『西遊記』のこのエピソードに「前後で異なる二角を持った」正しい二角犀の挿絵を添えることは、そもそも無理があったのであり、テキストとのあいだに矛盾をもたらすものであった。おそらくは、プロとしての真摯な気持ちから、「正しい犀」イメージを描くことに意を注いだ現代の絵師たちは、そのあたりの『西遊記』の細部については頓着せず、読み飛ばしてしまったのだろう。一角犀と二角犀を混在させている図像表現にいたっては、動物学の図鑑を参照することに熱心なあまり、『西遊記』のテキストの流れから乖離してしまった痕跡にほかならないであろう。「動物図鑑によれば、犀には一角と二角がいるから、どちらも描いておこう」——そういう判断のもとに両者の混在が生じたのだとしたら、そのとき絵師は、すでに『西遊記』のストーリーを忘却していたのかもしれない。

現代の『西遊記』の読み手としては、「犀牛怪」を、「奇蹄目サイ科に分類される〈犀^{リノケロス}〉の妖怪」ではなく、「むかしの中国人が〈犀牛^{シーニウ}〉と呼んでいた、ある種の動物の妖怪」とでも理解しておいて、「牛のような二本の角を生やした動物」のイメージを想い描いておくべきなのだろう。いずれにしても、われわれが、時を隔てた人びとの想像力に近づこうとするならば、黙々と、さらに多くの「象の骨」を拾い集めることに専念しなければならないようだ。

【注】

- 『西遊記』第92回「那是三個犀牛之精。他因有天文之象，累年修悟成真，亦能飛雲步霧。其怪極愛乾淨，常嫌自己影身，每欲下水洗浴。他的名色也多。有兕犀，有雄犀，有牯犀，有斑犀，又有胡冒犀、墮羅犀、通天花文犀。都是一孔三毛二角，行於江海之中，能開水道。似那辟寒、辟暑、辟塵都是角有貴氣，故以此為名而稱大王也。若要拿他，只是四木禽星見面就伏。」
- ベルトルト・ラウファー『サイと一角獣——中国人と聖なる角のイコノロジー』（武田雅哉訳。博品社、1992）を参照。この邦訳書は、Berthold Laufer, *Chinese Clay Figures, Part I: Prolegomena on the Defensive Armor* (Field Museum of Natural History Publication 177, Anthropological Series., Vol. XIII, No.2. Chicago, 1914, pp.73-315) の第一章を構成する「サイの歴史」(1. History of the Rhinoceros.) の翻訳である。
- 池本理『禽星易見』。同書にはまた「井木犴、伏一切山水禽」「角木蛟、亢金龍、伏一切水禽併飛禽」などの文言も見える。
- 犀角の工芸品については Jan Chapman, *The Art of Rhinoceros Horn Carving in China*. 1999, Christie's Books Ltd. を参照。スマトラサイなど、二角犀における前角 (anterior horn) と後角 (posterior horn) の差違については、同書 pp.52-54、湄舟一叶「明代蘇門答臘犀牛角雕達磨擺件」 (http://blog.sina.com.cn/s/blog_83e1df800100ugbx.html) などを参照。
- ハラルト・シュテンプケ『鼻行類——新しく発見された哺乳類の構造と生活』（日高敏隆、羽田節子訳。思索社、1987。いま平凡社ライブラリー、1999）参照。

- 6 デューラーの「犀」の文化史的意義については、T. H. Clarke, *The Rhinoceros from Dürer to Stubbs, 1515-1799: An Aspect of the Exotic*. 1986, Sotheby Publications. が豊富な図版とともにおもしろい。その抄訳に武田雅哉訳「〈デューラー・サイ〉の誕生－1515年：リスボン」（『ユリイカ』1993年1月号、青土社）あり。
- 7 『飛影閣画報』光緒17年（1891）2月中澣号「中外百獣図」「独角犀牛」および同光緒18年（1892）9月下澣号「中外百獣図」「双角犀牛」。リプリント版では『呉友如画宝』（上海古籍書店出版、1983）第四集第上冊九葉表「中外百獣図」「独角犀牛」、第四集第下冊十四葉裏「中外百獣図」「双角犀牛」。
- 8 『澄衷蒙学堂字課図説』（澄衷蒙学堂、1904）。
- 9 『清彩絵全本西遊記』（清・佚名/絵画、邵嘉瑜/配文、孟慶江/主編。中国書店、2008）。
- 10 『新説西遊記図像』下冊（呉承恩著、張書紳/注。味潜齋年石印本影印。中国書店、1985）。
- 11 同作品は、1975年以来、新雅文化事業有限公司から刊行された全40編から成る『西遊記』連環画シリーズの第27編として、合訂本全4冊（1頁に2コマを収める）の形で刊行されているが、新雅版はそのすべての作品に「編写：羅浪、絵図：祖元」なるクレジットを配している。だが、新雅版に含まれているいくつかの作品は、これに矛盾するものである。たとえば新雅版第24編の『火焰山』は、1954年に新美術出版社から刊行された徐宏達の有名人作品だし、第2編『大鬧天宮』と第19編『通天河』は、1955年、新美術出版社刊行の陳光鑑の作品である。また第32編『無底洞』も、同じく1955年、新美術刊行の凌濤・劉錫永の作品だ。絵師の「祖元」とは、民国時期から活動している王祖元のことと思われるが、全作品を羅浪と祖元に帰している処理の背景に、いったいどのような事情があったのかは不明であり、いずれにしてもこの標記は信用できない。ただし、いま見ようとしている『活捉犀牛精』は、王祖元の名で1962年に香港美麗美術社から刊行されたものであることが確認できる。
- 12 この絵本は2008年には新装版が刊行されている。本作品の中国語タイトルは『挾捉犀牛精』であり、1994年に海豚出版社の「美猴王系列叢書」全32冊の第31冊として中国語版が刊行され、2017年には朝華出版社から新装版が、「呉承恩/原著、火辣果子/改編、洪濤・施蔚/絵画」のクレジットで刊行されている。
- 13 『三盗芭蕉扇』（盧光照/改編、任率英/絵。河北人民美術出版社、1956年）。いま『三盗芭蕉扇』（路遠/編文、任率英/絵画。陝西人民美術出版社、2008）による。
- 14 ウンベルト・エーコ『薔薇の名前（下）』（河島英昭訳。1990、東京創元社）99～100頁。
- 15 マルコ・ポーロ『東方見聞録2』（愛宕松男訳注。平凡社東洋文庫、1971、平凡社）152～153頁。中世フランス語写本から訳された『東方見聞録』（月村辰雄・久保田勝一訳。2012、岩波書店）では208頁を参照。
- 16 杉橋陽一『一角獣の変容』（1980、朝日出版社）、R・R・ベア『一角獣』（和泉雅人訳。1996、河出書房新社）、ジョン・チェリー編著『幻想の国に棲む動物たち』（別宮貞徳訳。1997、東洋書林）など参照。

* 本稿は、拙著『西遊記－妖怪たちのカーニヴァル』（慶應義塾大学出版会、2019）の一部に大幅に加筆したものである。



Albrecht Dürer
Die Melancholie (Melencolia I), 1514